

「ぶどう園の収穫」

ルカによる福音書 第20章9節～19節

説教 岡村 恒牧師

「わたしの息子を」と、ひとり子をぶどう園に送りました。この、ぶどう園の主人とはどのような人だったのでしょ

う。ぶどう園の主人が旅に出ます。大切なぶどう園を農夫たちに貸して旅に出たのです。それは、大きな信頼があつての事です。時が来れば豊かな収穫があると、主人は信じていたのです。

主イエス・キリストは、このぶどう園の主人について語っておられます。この主人こそ、天地を造られた神です。神はどんな方だったのでしょ

う。主人は長い旅に出ました。旅には終わりがあります。戻るまでの間、ぶどう園は刻一刻変化します。雨が降り、実をついばむ鳥がいます。農夫たちは、それらから、ぶどうを守らなければなりません。

収穫の時を主人は期待していました。それは、自分の期待に農夫たちが応えてくれると、思つての事です。しかし、事件が起こります。遣いを送つたのに、その遣いは袋叩きにされ、手づらで主人の所に返されて来ます。本当なら、主人の遣いとあれば、一緒に喜べる筈です。早くに実をつけたぶどうを持たせて、主人の所へ返すのではないのでしょうか？そして、2人目の遣いも袋叩きにされ、3人目の僕も傷を負わせられて追い返されました。

この話を聞いた律法学者、パリサイ人たちは、自分たちの事を言っているのだと悟ります。主人の物を主人に返すという事を預言者は語るのですが、その預言者を袋叩きにして殺すのですから。神など、まことの主人などいないかの様に生きていたのです。これこそ、私たちの姿ではないのでしょうか？神の時が来たのに…。しかし、ぶどう園の主人は、なおも農夫たちを愛し、愛する息子を送ります。これは、どう考えてもおかしな話です。“徹底的”を意味する完全数の3。その3人を送っているのに、さらにこの異常なぶどう園に息子を送るのです。

農夫たちは、この息子を見ても殺して、財産を貰おうとします。跡取りの息子を殺したところで、どうして主人の財産が手に入るのでしょうか？農夫たちは神の愛情を信じきれず、思い違いと誤解をします。後に律法学者、パリサイ人たちは、自分たちが農夫の立場にあつたと教えられます。そうして本当の事を暴かれた

ので、神のひとり子、イエス・キリストを殺そうとしたのです。

イエスは、父なる神の愛を理解しない人間の姿を描き出されました。私たちも、主人と共に喜べる事がある事に気づくことができません。神の喜びと一緒に喜びではなくて、自分の喜びを自分のものとしてしまうのです。

主イエス・キリストは後に、あのひとり息子のように、町の外に連れ出され、十字架に架けられ殺されてしまいます。私たちの所に遣わされたイエス・キリストは、私たちが神と共に収穫を喜び為に遣わされたひとり息子です。しかし、神無しに生きようとする私たちは、主人の力を侮り、神のひとり息子、イエス・キリストさえ殺そうとするのです。

主人に対して逆らう農夫たちはひとり息子を殺しました。詩篇118篇に「家を建てる者の退けた石が隅の親石となった。」(22節)と書いてあるように、何も要らないと、人々が捨てた石。そこでこそ、驚くべき神の力が発揮されます。神の愛が実現するのです。

神無しに生きようとする私たちによって殺され、棄てられた神のひとり子、主イエス・キリストは、しかし、もう一度、神の愛の中へと私たちを連れ戻して下さいました。本当の主人を自分の人生から排除して棄ててしまう私たちを、なお愛して下さいました。

私たちは、主人が戻って来てぶどう園を他の人々に与えて当然だと思ひます。しかし、息子の主イエスを殺した農夫たちに、「わたしの所に帰れ」と神は言われるのです。十字架上で主イエスは言われました。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と(ルカによる福音書 23章34節)。

神から奪い取って自分の物にしようとする人の罪の為に、イエスは十字架に架けられたのです。この十字架こそ、私たちが受けるべきものでした。本来、裁かれる者である私たちです。しかし神の約束を信じ、ただ信仰によって神の愛の内に招き入れられるようになりました。ここに「あなたと共に喜びたい」との神の声が響いています。ただ神の憐れみによって、私たちは赦され、生かされているのです。

(記 説教要約奉仕者)